【25】

氏名（本籍）	村松　晋（長野県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博甲第 2221 号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	三谷隆正の研究

主　査	筑波大学教授	文学博士	大濱徹也
副　査	筑波大学教授	文学博士	池田　元
副　査	筑波大学教授	Ｐｈ．Ｄ．	池田　裕
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	中野目　徹
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	竹村牧男

論文の内容の要旨

本論文は，キリスト者三谷隆正（明治22年～明治19年）の信仰と思想を時代人心のなかで内在的に読み解く作業をなし，「明治の青年」が抱ける国家への志を解析することで，近代日本における精神の奇跡を描かんとした5章10節で構成されている作品である。三谷は，内村鑑三に連なるキリスト者であり，第六高等学校，第一高等学校の教授を歴任，法哲学や国家論を講じ，学生に大きな存在感をもった高校教師として障害を閉じた教育者としても知られている。

序章「問題の所在」は，三谷隆正の信仰が祖国日本への強き一体感において問いかけられている意味を明らかにする上で，聖書と主体的に対峙するなかに提示された言動を分析する課題にかかわる視座を述べたものである。

Ⅰ「Ambitionの形成」は，三谷隆正の生い立ちにみる愛に飢えた魂が「永遠への希求」をめざす心の奇跡をふまえ，日露戦争後の青年が抱いた「国家への志」を位置づけ，内村鑑三との出会いがもたらした「神の器」たる召命を自覚した青年の一人となったことを説いた「内村鑑三との邂逅」で三谷が占めた場を提示したものである。

そこには，日露戦争の勝利がもたらした国家目標の喪失にくわえ，教育，信仰をも国家の下に一元化せんとする政策が生みおとした時代閉塞感に苦しみつつ生きる意味を問う明治の青年が，「日本の天職」を説く内村鑑三との出会いをふまえ，「神の器」たる主体意識にうながされて職業を選択し，新たなる転生をなしとげていく姿が時代の相貌をふまえて活写されている。

Ⅱ「『神の国』と『地の国』」は，己を棄てて神に生きるという決断をした「大正七年の画期」の意味をふまえ，その信仰が「徹底他社」たる超越的人格神への没我的献身として自覚されるなかで説かれた「信仰の論理」にもとづき法と国家の関係を問い質した「信仰と国家観」で検証し，大正教養主義に対峙する三谷の実存と召命意識の確かさを解析し，主体の内的自立を固守すべく，国家権力が肥大化していく大正末から昭和初期の時代を撃たんがために苦闘する姿に「地の国」聖化をめざす漸進的改革への志を読み取り，国民と国家の在り方を時代の言動をふまえて問うた「時代への召命意識」を明らかにしたものである。

ここでは，第一次世界大戦，ロシア革命，米騒動という激動の時代を自覚的に問い質すことで，師内村鑑三が再臨運動を展開した意味を考察し，三谷がアウグスチヌス『告白』を読むなかに回心の磁場を手にしていく心の軌跡が描かれている。かくて三谷は，「神の国」の理想とその担い手たる自覚にうながされ，国家の理想と国民の

責務を説くことで，時代思潮に対峙する。その働きは，学問的営為であるのみならず，「神と共に働く者」たる己との場より生業を問い，その持ち場をとおして「地の国」聖化への一過程を担わんとの志にうながされた漸進的改革への希望に彩られた営みにほかならず，実践的信仰の所産といいうるものであると位置づけられている。

Ⅲ「待望」は，理想の家庭を手にした三谷が結婚後まもなく妻子と死別するという悲哀のきわみでエレミア書を読み，青年エレミアの召命に重ね，苦難にこめられた神の裁きの信仰にたどりつき，神の審判を通した祖国更新という逆説的な希望に開眼していく道程を「死の蔭の谷を歩むとも」で描き，内村鑑三，藤井武の死がもつ意味を時代人心に問うた「預言者の死」で三谷が祖国日本を救うべく強い危機感と召命感にうながされて志を奮い立たせ，戦争への道をひたはしる「祖国の危機」下にあってダニエル書が示した「神の力による完成」という希望をより恃む信仰にうながされ，祖国日本の危機を救わんとの思いで「バビロン捕囚」に思いをいたし，神の審判後の新地平を待ち望み，新日本建設の礎を『幸福論』に遺すべく心血をそそぐ姿を，矢内原忠雄ら内村鑑三につらなる無教会キリスト者の軌跡とかかわらせて描き，時代と対峙する三谷隆正の実存を位置づけ，戦時下日本の精神的位相を「朽ちるもの，朽ちないもの」として問い質したものである。

ここに描きだされた三谷は，昭和６年の満州事変，同８年の国際連盟脱退にみられる日本の危機の原点に日本国民の霊的腐敗があるとなし，神の裁判前のユダの歴史に重ねて日本の姿を聖書をふまえて読み取ろうとしている。こうした国家の危機にたじろぐ三谷は，「日本の理想を生かす為めに，一先ず此の国を葬って下さい」と昭和12年10月１日の藤井武記念後援会の壇上で叫び，東京帝国大学を追われた矢内原忠雄の声に唱和し，「正義を亡夫した国家は盗賊団に等しい」と告発し，現実国家の堕落を撃ったのである。その働きは，道義にささえられた理想の国家を樹立しうる信仰の種を大地に蒔くべく，病み衰えた肉体に鞭うちつつ青年学生に神により恃む信仰の勝利を封じこめんとの営みであったと，詳述されている。こうした三谷の言動は，戦時下を生きる「決死の世代」の青年にとり，生きてあることを確認せしめ，生命の糧となったことを同時代人の証言で明らかにしている。

終章「三谷隆正の求心力」は，三谷をめぐる昭和10年代の学生が抱ける精神的飢餓が醸す諸相を検討し，三谷隆正が説く神の裁きによる祖国更新への希望の信仰に，救済史を担うにたる「神の器」としての主体意識が読み取られていたことを指摘し，三谷の言説に時代閉塞感の強い現代の諸課題を問い質す場があると提言している。

ここに提示された世界は，昭和10年代の青春が日露戦争後の時代閉塞状況に通底する世界であることを読み取り，国家による強権的な支配と合理化がもたらした精神なき享楽を謳歌する近代日本をおおう腐蝕の構造への問いをふまえ，現代の諸課題を超克すべき場を説かんとしたものでもある。

審査の結果の要旨

本論文は，内村鑑三につらなるキリスト者三谷隆正が，聖書をいかに読んだかを検証するなかに，その言説がもつ意味を時代人心に位置づけることで「明治の青年」として国家国民によせた志のあり方を解析し，近代日本における国家をめぐる精神のドラマを描いた意欲的な作品である。

その第１は，「徹底他者論」として説かれた国家論がもつ意味を大正期の思潮に位置づけ，世俗世界のものである法と国家を信仰的批判原理に従属させ，主体の内的自立を固守する場を提示することで獲得した国家批判の視座がしめる位置を明らかにしたこと。

第２は，聖書のなかでもエレミア書をめぐる読みを検証する作業をとおし，神の審判による「逆説的希望」が問いかけた意味を，戦争の時代を生きた青年の課題と重ねて読み解き，昭和精神史に位置づけたこと。

第３は，『幸福論』を祖国日本の破局と更新への志を託した遺書と位置づけることで，国家を担うにたる精神のあり方を時代人心に問い質し，戦後精神史への視点を提示せんとしていること。

本論文は，三谷隆正の精神の軌跡を，現実国家とあるべき「国家の理想」をめぐる人間の生き方の問題として読み解くなかに描いた精神史として意欲的な作品と評価しうるものの，若干の問題も残されている。第１は「歴

史的個性」などの言説に託された「日本」像を日本精神史として読み直す作法においてやや弱いこと，第２は三谷がきずかんとした学問世界が有した固有性を同時代の研究状況に位置づけて読み取ることへの眼くばりが望まれることなどである。

本論文は，これらの課題が残されているものの，近代日本における国家国民のあり方を内在的に問いつづけた精神のドラマを三谷隆正の軌跡として解析し，精神史として結実せしめた作品として，学界に大きな地歩を占めるものと認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。